都留文科大學報

Vol.138
December.
2018

特集

北欧交換留学プログラム始動！

～「学びのグローバルコミュニティー」の創造に向けて～

第63回　桂川祭

新教員紹介　文大に着任するにあたって／夏季休業を利用して学外で学ぶ
教育実習を終えて／講演会だより／文大だより／ぶんだい堂

TSURU University

Photo：谷端真依（英文学科４年）

北欧の学生と地域を案内する
１年生たち（前列の３人）

国際教育学科

北欧交換留学プログラム始動！

～「学びのグローバルコミュニティー」の創造に向けて～

国際教育学科教授　原　和久

北欧から来日した学生たちと
（都留スタディアブカードプログラムオリエンテーションにて）

グローバル化の進展によりあらゆる場面で国際的な連携が進む中、様々な文化的背景を持つ人々と協力し、主体的に活躍できる人材の育成が急務となっています。

〈北欧留学中の２年生たち〉

フィンランド
(Abo Academi)

デンマーク (UC Syd)

デンマーク (UC Copenhagen)

国際教育学科では、単に英語「を」学ぶのではなく英語「で」学びを拓き、国際的な視野で行動できるグローバルエデュケーターを養成するべく、2年次後期より約半年間の海外交換留学プログラムをカリキュラムに組み込んでいます。留学先は、教員養成系もしくは教育学部を持つ北欧の大学で、現在、デンマーク6大学(10キャンパス)、スウェーデン1大学、フィンランド1大学の計8大学と協定を結んでおり、本学の学生たちはいずれかのキャンパスで現地の学生や留学生と共に英語で現地の授業を履修し単位取得をめざします。また、留学中は、現地の小中学校での教育実習やインターンシップを経験しながら、世界に通用する教育力を養成します。

国際教育学科は昨年4月にスタートしましたが、1年半の間、教育学の知識や英語力を強化すると同時に大学への入学申請や渡航手続きなど様々な準備を重ね、今年の夏いよいよ52名の2年生が北欧のそれぞれの大学に元気に飛び立っていきました。時々、学生たちから送られてくる現地レポートを読むと、言語の壁や文化の違いに苦労しながらも大学での学修や北欧での生活を満喫している様子が伺われ、とても頼もしく思っています。留学中の学生たちによると大学の授業はクリエイティブなものが多く驚きの連続だとのこと。来年帰国の途につく彼らの成長と土産話が今から楽しみです。

また、8月末には、逆に交換留学協定を結んでいる北欧の大学から28人の外国人留学生が順次都留市に到着し、本学でのスタディアブロードプログラムも本格的に始まりました。留学生たちは、学科で開設している専門科目を、授業によっては日本人学生と共に英語で履修しながら本学での学びを進めています。留学生たちのお蔭で、名実ともに5号館は多言語･多文化環境となり更に華やかになりました。また、滞在中、学生たちは日本の小中学校を見学し日本の教育制度について理解を深めたり、日本舞踊を体験したりしながら、地元の方々との交流も行っています。北欧の学生たちは、みな大変優秀で授業でも活発に議論が展開されるため、留学準備中の日本人の学生のみならず教員である私たちにとっても大変よい刺激となっています。

また、交換留学協定に基づいてお互いの大学を研究訪問したり、本学にて国際講演会を開催するなど、北欧大学の先生方と本学教員との研究・人事交流も既に始まっており、大学間の学術的連携の進展が大いに期待されています。来年度は、留学準備中の1年生、留学中の2年生、北欧から帰国した3年生、本学へ留学してきた北欧の学生たち、そして日本留学を終え北欧に戻った学生たちの間のインタラクティブな学び合いや交流もさらに活発で有機的なものとなるでしょう。日本でここ都留文科大学にしかないユニークな「学びのグローバルコミュニティー」の創造に向けて、そして大学間交流の更なる発展に向けて、さらに良いプログラムにしていきたいと考えています。

キーワードは「原点回帰」

教養学部
地域社会学科　教授　神長　唯

10月より教養学部地域社会学科に着任しました神長　唯です。専門は環境社会学です。

実は、本学とは少なからず御縁を感じています。遡ること四半世紀、進学した東京都立大学にて履修のため覗きに行った社会学の講義は大人気。階段教室の底、教員の姿はもはや豆粒のよう…で挫折。一方、当時都立大には二部（夜間）があり、金曜６限に非常勤講師による同一科目が開講されていました。体育会系バスケ部に所属していた私は毎回、部活を脱兎のごとく抜け走って出席したものでした。そこで環境社会学という魅力あふれる世界の一端を紹介してくれた非常勤講師の先生は、毎週、都留文科大学から母校である都立大に駆けつけていたのです。「もう少し環境社会学を学び続けたいのですが」と質問したところ、「環境社会学を日本で始めた、飯島伸子先生が着任されたから、教わると良いよ」と教えて下さった時の眩しい笑顔は今でも忘れられません。私もそのような出会いを学生に提供できるよう、日々精進して参りたいと思います。

教育を哲学する：　固有な実存の間で

文学部
国際教育学科　講師　木下　慎

はじめまして。2018年10月より文学部国際教育学科に着任しました木下　慎と申します。日・米・仏の教育哲学や日本の大正新教育思想などについて研究しています。

教育は本来的に、他者と共に世界に共存する仕方を学ぶことに関わっています。他者とこの世界を分かち合うこと、それは当たり前のようにみえて実は単純ではありません。私たちは代替不可能な生を生きていて、ひとりひとり固有の軌跡を描きつづけています。だとすれば、私たちは他者（子ども）と何を本当に分かち合えるのか。私たちの存在が分かたれているという事実に立ち返ったとき、教師と生徒の関係はどのようにあるべきか。生徒は教師と別の道を歩んでゆくほかなく、「私たち」は出会うたびに互いに分かたれてゆく。そのような臨界点から教育について考えてみたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

初等教育学科
平　和香子

感性を刺激する

食に関わる学びを授業展開している「生活環境科学通論Ⅲ（食生活）」では、今年度より学外授業として、食品工場見学を実施しています。

今年は、地元山梨県内にある６食品工場を、２日間に分けて見学を行いました。両日共に厳しい暑さの中での移動となりましたが、大きなトラブルもなく、無事に終了し安心しています。

学生は、普段の授業では体験することのできない、生産・流通の視点から食品を加工する視点を知り、工場レベルでの製造工程や衛生管理を直視することにより、安心・安全のために目に見えないところで大変な企業努力がなされていることを、深く学び得た様子です。

学外には体験するからこそ分かることが溢れています。本授業では、今後も安全面に配慮しながら、このような体験学習の場を大切にしていきたいと考えています。

学外で学ぶ

初等教育学科３年　工藤雅史

私たち生活環境科学専攻は８月９日、１０日に山梨県内の食品工場に工場見学へ行きました。２日間で大学の中だけでは決して得られないような実際に感じる学びが多くあり、とても良い経験となりました。

１日目は北杜市にあるシャトレーゼ白州工場とサントリー天然水南アルプス白州工場、サントリー白州蒸溜所へ見学に行きました。シャトレーゼ白州工場では小豆が餡子になる製餡の工程やアイスの製造、その他商品の製造、包装の様子をガラス越しではありますが間近で見学することができました。またそれぞれの見学スペースには製造工程が書かれたパネルがあり、こし餡とつぶ餡の製造方法の違い、おいしいスイーツを作るには質の良い水が必要であるため、この工場では４つの深井戸から水を汲み上げているということなどを知ることができました。サントリー天然水南アルプス白州工場とサントリー白州蒸溜所ではスーパーやコンビニでよく見かける「南アルプスの天然水」の製造工程や世界のウイスキーの歴史や文化を実物やパネルを見て学ぶことができました。

２日目は笛吹市にある桔梗屋信玄餅工場、マルス山梨ワイナリー、モンデ酒造へ見学に行きました。桔梗屋信玄餅工場では信玄餅の製造工程では、信玄餅の特徴である風呂敷包みをする様子が印象的で、ひとつひとつ人の手で包まれていました。また山梨を代表する土産菓子のひとつである信玄餅が有名になるまでの道のりや歴史を学ぶことができました。マルス山梨ワイナリーとモンデ酒造ではワインの製造工程の様子を見学しました。両工場とも蔵の中の温度は温度が低く保たれ、瓶の洗浄など、徹底した品質管理の様子を直に見ることができました。

この２日間で６つの山梨県内の工場を回り、普段見ることができない学習や体験をすることができ、多くの知識や学びを得ることができました。そして私たちが暮らす山梨県の食の分野をより探求していきたいと思いました。今回の学外の学習を今後のゼミに生かしていきたいです。

シャトレーゼ工場

山梨ワイナリー

国文学科教授
寺門日出男

古都長安で学ぶ

本学では多彩な夏季語学研修プログラムが用意されています。中国語については、古都･長安（現在の陝西省西安市）にある陝西師範大学で毎夏に実施しています。

研修は中国語の集中授業が中心ですが、史跡・博物館の見学や洛陽への一泊旅行など、大学の立地を生かしたプログラムも含まれています。中国への留学を考えている人はもちろん、異国での暮らしを体験したい方にもお勧めです。

夏期休業を利用して学外で学ぶ

国文学科２年　田浦佳純

2018年、夏。８月22日から９月19日まで中国の西安に行ってきた。中国語を学び始めたのは大学に入ってからである。私は外国語に苦手意識を持っており、「英語は今までやってきたから、他の言語にチャレンジすれば新しい扉も開けるのではないか。」そんな期待を抱いていた。結論から言えば、苦手意識が覆されることはなく、多言語を理解、吸収する難しさを改めて痛感した。しかし、学習意欲は向上した。

この研修は主に３つの時間からなる。陝西師範大学での授業、陝西師範大学の先生方が組んでくださった日程の観光地巡りや文化体験、そして自由時間である。陝西師範大学での授業は基本から教えられる。初級と中級の二クラスに別れるのだが私は初級のクラスに振り分けられた。特に発音を丁寧に教えていただいた。口頭でのコミュニケーションを目指す私たちにとってこれは大変重要な事項であった。観光地巡りや文化体験はどれもが楽しかったので期待に胸を膨らませて、たくさん歩いてもはしゃぎ続けられる体力を養っていてほしい。自由時間はかなりあたえられた。時々、私たちがあまりに疲れているように見えるからと言って、当初の予定を変更してできた休みもあった。本当に優しさにあふれた先生方であったと思う。半日休みの日と一日休みの日がある。休みはそれぞれ自分に合った使い方をするが、私はよく半日休みの日はスーパーに、一日休みの日はちょっと遠出をしタクシーやバスに乗って買い物に行っていた。チューターさんと予定が合えば、行きたいお店に連れて行ってくれることもあるので是非お友達になるべきだと思う。

私にとってこの一ヶ月間は学力向上を意識させ、海外に目を向ける第一歩となった。中国に対する考えや、物事の見方も変化した。再度、中国に行ってみたいという気持も芽生えている。不安も多々あったが、行く勇気を出して本当によかったと思える研修だった。

英文学科

英文学科教授
三浦幸子

現職の先生方とともに指導技術を伸ばす好機

ELEC 同友会英語教育学会は、日本英語教育研究委員会（現在の英語教育協議会）が 1957 年に開始した教員研修「ELEC Summer Program」を引き継ぎ、毎年 8 月に小中高英語教員を対象とした 3 日間の通学制ワークショップを開催しています。飯島さんは、研究を重ねている講師陣や熱心な受講者の先生方との対話的学び合いを通して、様々な理論と実践方法を学びました。自らの指導技術だけでなく、英語教師を目指す意欲も高められたと思います。

「ELEC 同友会英語教育学会 サマーワークショップ」に参加して

大学院 1 年　飯島智美

夏季休暇を利用し、ELEC 同友会英語教育学会主催のサマーワークショップに参加しました。指導技術に関するワークショップや少人数のホームルームに分かれて行う模擬授業など、参加者が主体的、体験的に学ぶことができる 3 日間のプログラムです。参加者のほとんどは現職の先生方ですが、学生の参加枠もあり、私は実践力を鍛えたいと思い、挑戦する気持ちで参加を決めました。

アドバイザー講師によるテーマ別ワークショップでは 4 つの講座を選択して受講しました。そのうちの『「やり取り」の前後の活動を工夫して技能統合型へ』ではリーディング活動の導入や理解を促す発問について学びながら、生徒の反応に対する教師の返答が「やり取り」を豊かにすると実感しました。意味のある「やり取り」が、後の産出活動にも繋がります。新学習指導要領では「即興で話すこと」が注目されていますが、これは教師に求められていることでもあります。生徒の反応に柔軟に対応できるようになるためにも、まずは十分な教材研究や発問準備と自らの英語力が重要であると学びました。

ホームルーム研修では一人 20 分間のプラクティス・ティーチングを行います。私は中学英語の比較・最上級の導入を担当し、既習事項を取り入れ教科書本文の内容と関連がある話題を使うことを意識しました。アドバイザーの先生方と相談しながら準備を進める時間があったことが、大変有意義でした。準備は大変でしたし、かなり緊張しましたが、その分、達成感がありました。授業後にはアドバイザーからだけでなく同じホームルームの参加者の先生方からもフィードバックをいただきました。今後もそれを見返しながら学んでいきたいです。

3 日間のプログラムを通し、英語教育の知識と指導技術に関して視野を広げることができました。また、教員として働いている学部時代の友人たちとの再会や、全国から参加した先生と交流ができ、刺激的で励みになる研修となりました。私は現在、修論で学習項目に対する生徒の気づきを促す導入方法について取り組んでいます。今回の経験と学びを自分の研究にも活かしていきたいと思います。

アドバイザーによる中学校授業を生徒の立場で体験する

地域社会学科准教授
鈴木健大

多くの支援をいただきながら

8月7日～8月13日にかけて岡山県倉敷市真備町で実施しましたボランティア活動は、災害支援サークルVS（バーサス）を中心に社会学科学生8人、地域社会学科学生3人、地域社会学科教員6名（内非常勤講師2名）が参加しました。私は、洪水被害を受けた家屋の片付けは初めてだったのですが、酷暑の中での作業は想像以上に厳しく、復旧作業の過酷さ・困難さを身をもって実感するとともに、大災害と私たちは隣り合わせにいること、社会のあり方を考えさせられる機会となりました。洪水被害のあった地域となかった地域との残酷なまでのコントラストが今も目に焼き付いています。今回の遠征は、本学のみならず、OBOGの皆様、倉敷市社会福祉協議会、水島地域環境再生財団、NPOフォレストフォーピープル岡山、国立吉備青少年自然の家ほか大勢の皆様の御支援で実現したものです。改めて感謝申し上げます。

現地に行ったからわかったこと

地域社会学科1年　**高瀬奈摘**

都留文科大学災害ボランティアサークルVS（バーサス）として、西日本を中心にして起きた大きな災害「平成30年7月豪雨」の復興ボランティアの活動を行ってきました。

8月7日に都留を出発して岡山県に向かい、翌8日から12日の5日間ボランティアを行いました。社会学科、地域社会学科の教授と学生が参加しました。国立吉備少年自然の家さんにお世話になりながら、被害の多かった真備町を拠点として様々な活動をしました。個人宅の家具や本等の片付けや掃除、家の解体作業の手伝いが主でしたが、避難所でお茶を飲みながら避難された方々と交流したり、地域のイベントのボランティアに参加したりもしました。

私たちが岡山県に行ったときは被害から約1ヶ月経過していました。しかし、避難所ではまだまだ避難されている方のサポートが行き渡っておらず、不安や生活のしづらさがたくさん寄せられていました。また、被害のあった家が未だに放置されたままのところが多く、アスファルトは砂に覆われていました。そのような災害の日から時間が止まったかの様なあの町の姿は忘れることはできません。被災した家は高齢者の夫婦や一人暮らしのお宅が多く、日本の昔ながらの創りがほとんどでした。したがって、自分たちだけでは片付けや掃除が出来ず、災害から日にちが経つにつれて家族・親戚やボランティアの手伝いも少なくなり、なかなか作業が進まないという事実を目の当たりにしました。

活動をしている間に、たくさんの人と交流し、様々な人の気持ちに触れられたと思います。大好きだったこの町が被災地になってしまった悲しみ、やりきれない辛い気持ちが、人からも家からも町全体の雰囲気からも感じられました。この活動を通して、被災された方の気持ちに寄り添う難しさを経験することができました。そして、私たちの活動を通し、少しでも多くの人を笑顔にすることができたなら、私たちが行った大きな意味になるのではないかと思います。

浸水被害のあった家屋の片付け作業

倉敷市立第五福田小学校避難所における「文大カフェ」

比較文科学科

比較文化学科
内山史子

夏季休暇を利用して学外で学ぶ

フィリピン中央大学での語学研修は、今年が二度目の実施でした。プログラムの中心は、少人数授業を中心にした英語の集中学習ですが、本文で述べられているように、研修地であるパナイ島イロイロ市の歴史を学ぶツアーや、貧困支援を行うNGOを訪ねる活動なども組み込まれています。研修所にはアジア諸国の学生が学んでおり、互いにノン・ネイティブとして英語で交流する経験をしたり、欧米とは異なるアジアの社会を見聞したりと、参加者にとって濃密な経験であったと思います。

フィリピンで学ぶということ

比較文化学科３年　村上さやか

8月26日から9月22日まで、私たちは英語研修と異文化体験を兼ねてフィリピンに滞在しました。この研修には語学学校での授業に加え現地の大学での講義、スキューバダイビングや市内ツアーなどの週末アクティビティも含まれており非常に充実した時間を過ごすことができました。約1か月にわたるフィリピン滞在でここには書ききれないほど多くのことを学びましたが、特に印象に残ったことについて振り返ります。

１つ目は韓国やベトナムから来た学生たちとの交流です。英語だけで行うコミュニケーションももちろん新鮮なものでしたが、何よりも各国の歴史認識について話ができたことで自分の視野の狭さに気付かされ、同時に大学の講義を受けるだけでは発見できなかった新たな視点を発見することができました。英語学習ももちろん重要ですが、こうした異文化交流を体験することで改めて自分の未熟さと知識の浅さに気付き、新たな知見を得ることができるという点が海外で学ぶことの大きな利点の１つであることは間違いないでしょう。

２つ目は自分のコミュニティを飛び出す勇気を持つことの重要性です。初めての体験が連続する環境の中で不安を感じるのは当然のことですが、だからと言って同じ大学の学生ばかりと行動していては普段の大学生活をフィリピンで送っているのと同じことでしょう。違う国から来た学生とはいえ、英語学習を目的としている点ではお互いに何も変わらず、勇気をもって話しかけたことで帰国後も交流をもてる友人たちを得ることができました。もし私が臆病になって日本人の輪にとどまり続ければ彼らと仲良くなることもお互いの文化について話す機会も得られなかったでしょう。その場で怖気づくことがどれだけ可能性を狭めるのかを自覚すると同時に、その恐怖を克服できさえすれば世界を大きく広げることができると学ぶことができました 。

３つ目はフィリピン滞在中に体感した価値観の揺らぎです。大通りのすぐそばで物乞いをする子供や夜の繁華街で物売りをする子供たちを何度も目にし、文献や資料を読むだけでは絶対に得られなかったであろう価値観の揺らぎを体感することができました。小学生くらいの子供が寄ってきて手を突き出される経験は間違いなく日本ではできないでしょうし、この経験を通じて私は貧富の差が激しい国がどういうものであるのかを、ほんの一端ではありますが「知識」としてではなく「事実」として学ぶことができました。

もしこの研修に参加しなければ、私はフィリピンという国について本で得る程度の知識しか持たず、これまで述べたような経験もできなかったでしょう。この研修において学んだことを今後の学業に生かしていきたいと思います。また、今回の研修でお世話になった方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

国際教育学科

国際教育学科
Johan Nordström

学外で学ぶ

大学の様々な授業で学んだ専門領域をより深く理解し活用していくためには、実際に行動に移してみるということも大切です。夏休み中に旅などをしながら、自分の目で世界や教育の現場を見て、他者と関わる経験を積むことは、大学生活の中でもとても貴重な体験になると思います。大学で得た知識と大学内では経験できないことを積極的に融合させることで、学術の世界と大学の外にある現実の世界との関連性についての理解が深まります。

授業での学びを活かして

国際教育学科１年　今坂優菜

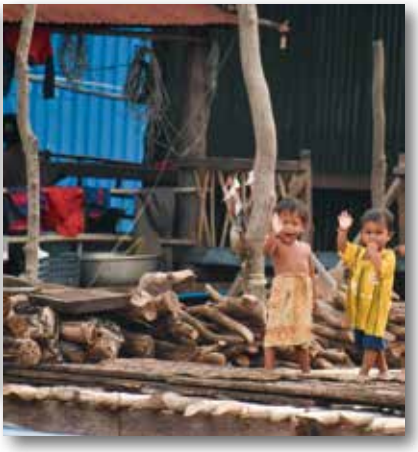
大学での授業を通して様々な知識を得ると同時に、「なぜそうなるのか」、「実際にはどうなのだろう」―そんな疑問が絶えず生まれました。これらの疑問は私のそのテーマに対する関心を高める一方、どこかモヤモヤした気持ちが常に私の中にありました。そこで、夏休みに日本、そして海外で、自分の持つ疑問を更に追究しました。

国際教育学科の授業では日本と北欧の教育を比較するこが多くあります。実際の日本の教育とはどういうものなのかという疑問をもとに、来年の北欧への留学の前に日本の教育現場を知りたいと思って、山梨の小学５、６年生と３泊４日で佐渡に行くプログラムに参加しました。大学生がそれぞれ小学生を約 10 人ずつ担当し、先生のサポートをしながら佐渡の観光を引率したり、現地の小学生との交流を促したりしました。この経験を通して私が最も学んだことは、「責任感」です。このプログラムの間、私は担当した子どもたちの食事や健康の管理をはじめ、子どもたちが元気に安全に過ごせるようにサポートしましたが、体調を崩す児童や、怪我をしてしまう児童もいました。このことから、先生という職業は毎日子どもの命を預かっているのだということに改めて気付きました。最終日に子どもたちが元気な顔で帰っていく姿を見た時は本当に嬉しく、命を預かることの大変さを学びました。現場の先生方と一緒に活動できたことや指導者の立場から日本の教育を見られたことは、大きな経験になりました。

佐渡でのプログラム

また大学で東南アジアからの外国人労働者について学んだのを機に、東南アジアの生活環境、労働環境について興味を持ったので、実際にタイとカンボジアを訪れました。観光地はもちろん、孤児院を訪ねたり、現地の人の家を訪ねたりして、生活も経験しました。この旅で私が感じたことは多すぎて語りきれませんが、本やインターネットの情報だけでは決して分からなかったことを数多く学びました。

私はこれらの経験を通して、授業で得た知識をより深く学ぶことができました。これからも大学での授業や日々の生活から感じることを大切にし、それらを探究してより成長していきたいです。



東南アジアにて▲▶

教育実習を終えて

初等教育学科３年　池山知佳

私は10月1日から26日まで、愛知県稲沢市立国分小学校で教育実習をさせていただきました。実習が始まる前は、楽しみであると同時に緊張や不安もありました。しかし、実習はあっという間に終わってしまい、私にとって充実した約1ヶ月間となりました。

私は4年生36人の子どもたちと毎日を過ごしました。体を動かすことが好きなので、それを生かして子どもたちとたくさん関わろうと実習前に決めていました。休み時間には4年生だけでなく、他学年の子どもたちとも鬼ごっこやドッジボール、鉄棒などをして楽しく体を動かし、様々な子どもたちと関わることができました。

実習校では、実習1週目は、子どもたちの授業観察を主に行い、少しずつ交流しながら過ごすことが出来ました。実習2週目から毎日1時間ずつ、授業をさせていただきました。担当した授業で、45分の授業をつくる大変さ、子どもたちに伝えたいことを伝える難しさを実感しました。そして、様々な教科の授業をさせていただき、教科によって授業のしかたや教材の工夫も変わってくることを学びました。毎日授業をさせていただいた中で、私の大きな課題は「発問のしかた」でした。子どもたちが考える時間、聞く時間、ノートやプリントに書く時間としっかり時間を分けることが大切であると教えていただきました。また、子どもたちに伝えたい内容を明確化し、発問の内容をかみ砕きながら、今何を考える時間なのか、何を答えるのかを明確にして、理解しやすくすることが大事だということを先生方に教えていただきました。うまくいかず悩んだこともありましたが、毎日授業をさせていただくことで、どのような発問が子どもたちにとって分かりやすく、考えるきっかけとなるかということが少しずつ掴めるようになりました。そして、子どもたちが問題を解いた後に笑顔で挙手をしてくれたときや、私が伝えたかったことがしっかりと伝わっていることが分かったとき、授業後に「先生の授業が分かりやすかった」と直接言ってきてくれたときなど、とても嬉しかったのを覚えています。

また、全先生方の授業を参観させていただき、ご指導もしていただきました。学年によって話し方、声かけ、指導するうえでの注意点などの違いがあることが分かり、それぞれの先生方の授業スタイルや先生方のカラーというものも大事であることを感じました。先生方から教わったことを自分の授業で生かしたり、真似をしたりしながら経験を積むことができました。

19日間の教育実習で、私は多くのことを学び、経験させていただきました。元気で明るい子どもたち、お忙しい中たくさんご指導いただいた先生方、声をかけて励ましてくださった職員の方に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちを忘れず、教師になることを目指して残りの大学生活を悔いのないように過ごしていきます。

こどもからもらったプレゼント

教育実習を終えて

国文学科３年　阿久津　望

「学校の先生になりたい」と思い始めた時から早６年が経った。実習はまだまだ先だと思っていたが、案外早くやってきたことに焦りを感じた。実習先は母校ではないということもあり、実習前は楽しみより不安の方が大きかった。

実習初日、早速体育館のステージの上で簡単な挨拶をした。何度も思い浮かべた光景であった。たくさんの生徒の視線を受け、「あぁ、いよいよ始まったのだな」と気持ちが引き締まった。３週間の実習は本当にあっという間だった。

最初の１週間は、主に諸先生方による講話を受け、空いた時間に担当クラスや担当教科の授業参観をした。そして、昼食を生徒と共に取り、清掃をし、気づくともう放課後で、時間の流れがいつもより何倍も早く感じた。初めは予定をこなすことで精一杯だった。

２週間目からは、いよいよ授業を任された。私に授業ができるのだろうかと心配と緊張でいっぱいであったが、意外にも授業をし始めてから実習が楽しくなっていった。もちろん、上手くいくことばかりでなく落ち込むことや悩むことも多々あった。だが、それ以上に嬉しいことがたくさんあった。進んで手を挙げてくれる子、勉強が苦手でも一生懸命活動に取り組んでくれる子、そんな生徒たちの優しさや頑張りを見ていると、次の授業は何をしようか、どうやったら楽しく分かりやすいい授業になるだろうかと、次の活動を考えるのにも熱が入った。準備に夜中までかかることも少なくなかったが、生徒から返ってくる反応を思うと、全然苦にはならなかった。授業は一方的に私が話すのではなく、生徒が主体的に学んでいく形にしたかったので、生徒の活動を中心に組み立てていった。そのため、授業中に予想していなかった質問が飛んでくることや予定通りに進まないことも多くあった。だが、私も生徒と共に頭を働かせる中で学ぶことがたくさんあり、大変であったがその分やりがいも大きかった。そうして一緒に活動していくことで自然とコミュニケーションを取る機会が生まれ、日に日に生徒との距離が近づいていくのを感じた。

生徒の顔と名前を覚え、どんな子なのかが分かるようになった３週間目。１番私らしくやれたと思う。最終週は研究授業がありとても緊張していたが、生徒の協力もあり無事に終えることができた。そして、実習先にたまたま元担任の先生が２人勤務していらっしゃったのだが、研究授業を観ていただくことができた。かつての担任の先生の前で授業をすることに恥ずかしさもあったが、終わった後に「先生の顔になっていたね」という言葉をかけていただけ嬉しかった。

積極的に生徒と関わることを目標にした３週間。たくさんの生徒と関わる中で、大学の授業で学んだことが生きたところもあり、新しく得ることも多くあった。そして、導入や授業構成の工夫、発問の仕方など今後の課題を見つけることができた。今回このような貴重な経験ができたことに感謝をし、残りの学生生活は課題解決に向け努力していきたい。

実習写真

教育実習を終えて

英文学科４年　池　　京香

このタイトルを見て、あなたが想像する内容は何だろう。辛かった思い出？ それとも、人生のプラスになる良い経験談？ もしくはそれの両方だろうか。中には、題だけで拒否反応が出る方もいるかもしれない。何を隠そう、かくいう私もそのうちの一人だった。実習を終えての感想を読むと、９割がマイナスワードの嵐。「教育実習」が上の句ならば、下の句には「大変」「寝不足」が確実に入ってくるだろう。そんな前イメージのために「楽しみ」という感情を抱くことなど到底出来なかった私は、「恐怖の４週間」を前にただただ不安感に苛まれていた。

だが、それは全て杞憂に過ぎなかった。

私を待っていたのは、笑顔と優しさ溢れる生徒、先生方、実習生の仲間との「楽しい」「幸せ」が詰まった、「思い出に残る４週間」だったのだ。担当学年は２年生。実習初日から生徒と沢山会話をし、出来るだけ早く顔と名前を覚えようと努めた。廊下ですれ違うと声をかけたり、給食や休み時間、授業の合間を縫って生徒とのコミュニケーションを図った。２日目が終わる頃には、ファーストネームで呼びかけ、生徒たちからも「池先生～」と話しかけてきてくれるようになった。

心配案件の最上位にあった授業も、指導教諭の先生のお陰でストレスを感じることなく、楽しく行うことができた。ビンゴ、なりきり芝居、未来日記… どうしたら生徒の心を惹きつけられるかを第一に考え、アイディアを形にした。ALT の先生とも話し合いを重ね、ディズニーの歌やクイズ大会など、普段の授業とは一味違う「楽しさ」を皆で共有することができた。授業後は教卓を生徒が取り囲み、和気藹々とした良い雰囲気が全体を通して生まれた。そうした日々の積み重ねが、最後の研究授業まで良い形で繋がり、生徒も私も全力で楽しむことができたのではないかと思う。

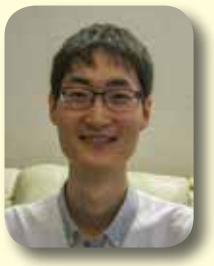
今回の実習を通して感じたのは、「一生懸命」であることがいかに大切かということだ。時に失敗し、自分では納得がいかないとしても、その一生懸命さを生徒は感じ取り、応えてくれる。生徒を心から思い、真っ直ぐに向き合う姿勢は必ず伝わるのだと身を以て実感することができた。毎晩夜中まで起きて、ワークシートやピクチャーカードの作成、部活後の実習簿記入… 身体的には疲れを感じることもあったが、学校に行き、生徒の笑顔を見ると、そんなものは全て吹き飛ぶ。「教員はブラックだ」とメディアの多くは取り上げているが、こんな素敵な職業は他にはない、そう思えた最高の４週間であった。

私は来春からいよいよ教壇に立つ。これは教育実習がなければ叶うことのなかった夢であり、沢山の出会いに本当に感謝している。母校ではないにも関わらず、あたたかく迎え、様々なアドバイスをくださった先生方。毎日遅くまで一緒に残り、心の支えになってくれた実習生の仲間。そして、まっすぐな瞳でいつも応援してくれた生徒のみんなに心から「ありがとう」

生徒達からのプレゼント

実習録

社会学科現代社会専攻４年　根岸実希



社会学科現代社会専攻４年の根岸実希です。私は主免許で高校地歴、副免許で小学校を取っているため、高校と小学校の２校に実習に行きました。

初めに実習を行ったのは高校で、５月末から３週間お世話になりました。担当科目は世界史です。私が担当したクラスは高校二年生の、学年の中でも優等生が多いとされるクラスでした。授業中は静かに話を聞いてくれます。ただ静かすぎる。その空間に耐えられなくなった私は、授業で度々する寸劇に力を入れ笑いを誘うよう努力しました。なんといっても緊張しているので、そうした些細な空気の変化で緊張は和らぐものです。結果的に授業のしやすい環境にすることができました。

生徒との距離感をある程度縮めるため、日直の書く日誌のコメントに力を入れたりもしました。先生からのコメントが多いだけで生徒は嬉しいはず、という信念のもと、「今日も平和だった」などという日直の感想にも記入欄の余白を埋める勢いで書きました。別れ際にもらった色紙を読んで発覚したことですが、かなりウケていたようです。他にも色紙で発覚する生徒の思いの数々。来週の授業も頑張ろう！という気持ちになりました。来週から大学だったのが何とも残念でしたが。ともあれ自分がやりやすいように工夫をすることは大切です。その辺のヒントは実習生の仲間や指導教員の先生から得られます。大変な実習だからこそ、その辺の工夫一つで楽しめるというものです。

色紙

続いて実習を行ったのは小学校です。10月の初めから２週間という短い期間でやらせていただきました。担当した学年は２年生です。まさか初日から児童に元気を分けてもらえるとは思っていませんでした。朝礼で挨拶を済ませ担当クラスに向かうと、私に気付いた児童が駆け寄ってきて「ねえねえ名前は？」と聞かれました。そこから児童に囲まれて質問攻めです。緊張は消し飛びました。こっちが何もしなくても、児童は私をクラスの一員として受け入れてくれたのです。

基本的に１日中クラスにいて、児童と話し、児童と遊び、児童と学びました。私がこの生活の中で常に心掛けていたのは、児童の話をないがしろにしないことです。子供だからと言って適当に話を聞いたりはしませんでした。一度に３人がお構いなしに話しかけてくるのが常だったので、「今は○○さんの話聞いてるからあとでね。」とよく言いました。絶対にその後、その子の下に行き「それで、さっきのお話しようか。」と話しかけに行くことは欠かしませんでした。児童は一連の流れを良く覚えています。「あとで」といわれてあとで来ない先生に果たして児童はまた話しかけようとするだろうか。そう思い、私はこれを心掛けていました。

私の教育実習は大学での事前指導、実習生の仲間との話し合い、指導教員の先生からの助言、その他にも多くの助けがあり成り立ちました。非常に良い経験ができたことを協力していただいた皆様に感謝するとともに、ここに書いた体験談が少しでもこれから実習を行う後輩の皆さんの助けになればと思います。

2018年英文学会前期講演会

開　催：2018年７月５日(木)
講演者：遠山　顕氏

英語ユーモア事始め　英語を学ぶヒントとして

英文学科前期の講演会では NHK 英語ラジオ講座のパーソナリティを務めている遠山顕さんをお招きして、英語に興味を持ちユーモアに向かいはじめたきっかけや、ユーモアの形と実用的な使い方についてお話をしていただきました。

遠山さんの全てはラジオから始まったそうです。戦後のラジオで落語を聞くのが好きで、当時遠山さんは７歳で大人娯楽である落語を聞いていても笑うツボを理解することができませんでしたが、すこしでも理解できたときは畳の上を転がり回って喜んだとのこと。ネタがわかるのが大人と同じになれたと感じ、嬉しかったのです。これ以降もユーモアがわかるという喜びは、遠山さんの人生に深く関わっていきます。遠山さんはその後高校生になって、クリスチャンの友達に誘われたバイブル教室で牧師さんに苦心の末の質問をしたとき、彼がちいさくクスリと笑ったときも、落語の時のような「通じた！」という喜びを感じました。対訳の『ハムレット』を買ってから、それに夢中になっていた時にも同じ感情を感じました。“A peace of him.” という台詞を、どういう気持ちでそのキャラクター (Horation) は話したのか理解できたとき、シェークスピアの体温を感じ、つながったという気持ちになったそうです。遠山さんは、笑いが自分の成長を示すバロメーターになったのだと話してくださいました。

そして、ユーモアは２つに分けることができるそうです。１つは人を笑うユーモア、もう１つは自分を笑うユーモアです。その例としてエリザベス女王のスピーチが紹介されました。彼女はスピーチの中で、メディアによってつけられたネガティブなあだ名を逆に利用したのです。女王の自分を笑うユーモアには人を引きつける力があり、それが外交をうまくさせているのだそうです。それと比べて日本のユーモアは人を馬鹿にするようなものが多く、要人・公人のスピーチはユーモアに欠けていると語りました。人を笑うユーモアだけではなく、自分を笑うユーモアを身に付けること、ユーモアの幅を持たせることが大事なのだと教えてくださいました。ユーモアには人と人とを結びつける力だけではなく、その場の雰囲気を変える力があるのです。笑いとは意外性が生み出すものであり、１人で生み出すことはできず、凝り固まったアイデアから自分を出してくれるものなのです。ユーモアには thinking outside the box という姿勢が大切で、その力はビジネスや生きていく上で重要だと話してくださいました。

最後に、遠山さんは語学学習をする上で失敗をすることを恐れてはいけないと教えてくださいました。“Silence is gold, speech is silver” という言葉があります。なぜ speech は銀なのでしょうか。遠山さんの解釈では、話す事は銀と同じで磨き続けなければ錆びていってしまうからだそうです。私たちは母語を習得する過程でも沢山のミスをしてきています。失敗を恐れずに外国語を使い続ける事が大事だという発言に、多くの学生は勇気をもらったのではないでしょうか。

（英文学科２年　大川水帆）

講師紹介

遠山　顕（とおやま　けん）

北海道出身。東京外国語大学英米語科卒、テンプル大学大学院修了。現在 COMUNICA, Inc. 代表、『遠山顕の英会話楽習』講師。東大 EMP（Executive Management Program）講師。過去に『百万人の英語』、『英会話入門』をはじめとし、数多くのラジオ講座を執筆・演出し、出演している。英語らしい自然な英語や、基本単語を組み合わせて話す英会話の特徴、そして英語特有のフレーズやイディオムなどを学ぶことが大事だと考え、それらを「楽習」することを目標としている。

2018年度比較文化学会前期講演会

「映画『野火』から考える戦争と平和」

開　催：2018年６月26日(火)　　講演者：塚本晋也氏

６月26日に、映画監督の塚本晋也氏を招いて比較文化学会主催の講演会「映画『野火』から考える戦争と平和」を開催した。

塚本晋也氏は、人間が鉄に変身していく恐怖を描く『鉄男　TETSUO』(1989年）をはじめ国内外でカルト的な人気を誇る監督である。自作での主演の他に、近年は『シン・ゴジラ』(2016年、庵野秀明監督）での生物学者、マーティン・スコセッシ監督の『沈黙』(2016年）の茂作、NHK朝ドラの『半分、青い』では風変わりな宇佐川教授を演じるなど俳優としても活躍している。

本会で上映された『野火』は、2015年に公開された大岡昇平の同名小説の映画化作品である。塚本氏は、十代で「野火」に出会って以来、長年にわたって映画化を望んでいたが、企画が持ち上げるたびに頓挫したという。紆余曲折を経て、2014年のベネチア国際映画祭で『野火』のワールドプレミアが上映され、遂に長年の悲願が結実した。日本では翌年の2015年に公開され、アート系映画館配給の映画としては予想外のヒットとなった。今回、「映画『野火』から考える戦争と平和」と題した講演会に塚本氏を招聘したのは、塚本氏が、『野火』の公開以後も、毎年８月15日前後に上映運動を続けておられることに共鳴したからであり、本会での上映は、一般の映画館での上映に先行することとなった。

映画『野火』は、1959年に市川崑監督によって映画化されている。塚本版の『野火』は、再映画化にあたるため、参加した学生には「表象文化論」等の講義で1959年の市川版との違いを学ぶ機会を事前に設けた。『野火』には人肉食を含む残酷な表現が含まれることを告知していたものの、生々しい映像の数々に衝撃を受けた学生たちも少なくなかった。だが、上映後のティーチインでは、塚本監督を中心に、戦時期のフィリピン事情に詳しい内山史子先生と志村が加わり、当時のフィリピンでの戦闘、撮影秘話、「残酷」といわれた表現に対する監督のこだわり、そして『野火』の上映活動を続ける意義などをめぐって鼎談し、参加者からの質疑応答も活発に行われた。本学学生限定の講演会（上映後のティーチインは一般参加も可とした）であったにもかかわらず、参加人数は242名を数える盛会となった。映画上映だけでなく、映画史と歴史学の教員が連携し、実作者と対話することで、より深い知見を参加者に提供することが可能となり、比較文化学会が主催するのにふさわしい講演会となった。

（比較文化学科　准教授　志村　三代子）

講師紹介

塚本晋也（つかもと　しんや）

1960年１月１日、東京・渋谷生まれ。14歳で初めて８ミリカメラを手にする。87年「電柱小僧の冒険」でPFFグランプリ受賞。89年「鉄男」で劇場映画デビューと同時に、ローマ国際ファンタスティック映画祭グランプリ受賞。主な作品に、「東京フィスト」、「バレット・バレエ」、「双生児」「六月の蛇」「ヴィタール」「悪夢探偵」「KOTOKO」「野火」など。製作、監督、脚本、撮影、照明、美術、編集などすべてに関与して作りあげる作品は、国内、海外で数多くの賞を受賞。北野武監督作「HANA-BI」がグランプリを受賞した97年にはベネチア映画祭で審査員をつとめ、05年にも２度目の審査員としてベネチア映画祭に参加している。俳優としても活躍。監督作のほとんどに出演するほか、他監督の作品にも多く出演。「とらばいゆ」「クロエ」「溺れる人」「殺し屋１」で02年毎日映画コンクール男優助演賞を受賞。「野火」で15年、同コンクールで男優主演賞を受賞。

2018年度地域社会学会講演会

多様な私たちが多様に生きられる社会をつくる

—LGBT アクティビズムと研究を通して—

開　催：2018年7月11日(水)
講演者：砂川秀樹氏

地域社会学会では 2018 年 7 月 11 日（水）に、砂川秀樹さんをお迎えし、性的マイノリティーの多様性に関すること及びその活動に関する講演会が行われた。

この講演会は都留文科大学の卒業生である砂川さんの講演を聴くことで LGBT について身近なものとして感じ、社会の在り方について考えるきっかけにしてもらおうと企画した。

講演会では、砂川先生の子供のころのお話、学生時代のお話や、在学中から行っている HIV の啓発活動について、また、東大大学院に進み、新宿 2 丁目のゲイコミュニティーについての研究を始めていったお話などを聞くことができた。砂川先生は子供のころから男性を好きだという自覚があり、家でも学校でも疎外感を抱き、まるで異星人のようだと感じていたという。大学入学後も親しい友人数人にはゲイであることを伝えていたが、仲間を見つけられなかったと感じ、月に数回都内へ行き、仲間と出会えたことで自分を受け入れることができたという。そして前述のように、在学中から行っていた HIV の啓発活動や、2000 年に実行委員長として参加した東京レズビアン＆ゲイパレード 2000 を復活させたり、先生の出身地の沖縄でピンクドットというイベントを開催したりするなど、砂川先生の活動家としての側面を見ることもできた。とくにピンクドット沖縄の活動では沖縄出身で、カナダで結婚している同性パートナーを招き結婚式を行うなど、沖縄から LGBT が生きやすい社会を目指すという活動を行ったことを聴いた。

砂川先生の研究の原点になったのは「同性愛者と異性愛者の非対称性」で同性愛者の恋愛話は異性愛者に避けられるが、同性愛者はそうではないことに違和感を抱いていたという。そういうことから同性愛者は疎外感を抱いてしまうという。

砂川先生は後援会の最後に「当事者に話を聞いても嫌だ、という気持ちは変わらないかもしれない。でも、態度や行動を意識して変えることができる。」ということをおっしゃった。

講演を聴いた学生の中には、「砂川先生の LGBT 当事者としての側面としてではなく活動家として自らの立場や環境をよりよくしていこうとする姿に刺激を受けた」「イメージでは恋愛の話などはタブーなのかと思っていたが、むしろ当事者のかたとは、そういった話をすることでより打ち解けることができるということに気づいた。」などという感想を持った学生も多かった。企画した側として多くの学生が多様なコミュニティーの中で多様に生きられるためにどのようにするべきか考えられる機会を設けることができた。

（地域社会学会学生代表
社会学科現代社会専攻４年　小松直人）

講師紹介

砂川秀樹（すながわ　ひでき）

1966 年、沖縄県生まれ。文化人類学者／ゲイ・アクティビスト。都留文科大学を卒業後に、東京大学大学院に進学し博士号を取得。2000 年には実行委員長として「東京レズビアン＆ゲイパレード 2000」に参加。2005 年から東京プライドパレードに関与する様になり、2008 年には代表に就任。
著作に『新宿二丁目の文化人類学』（太郎次郎社エディタス ,2015）、『カミングアウト』（朝日新聞出版 ,2018）など。

2018年度 都留文科大学大学院文学研究科講演会

ヴァージニア・ウルフ

――人生を描く

開　催：2018年11月6日（火）
講演者：スーザン・セラーズ教授

2018年秋の大学院文学研究科講演会は、文学が美術、音楽、演劇とジャンルを超えて展開する可能性を提示する特別なイベントとなりました。600年以上の歴史がありウィリアム王子ご夫妻も学んだ英国セントアンドリュース大学のスーザン・セラーズ教授に「ヴァージニア・ウルフ――人生を描く（“Virginia Woolf: The Writing of Life”）」と題し、ウルフ文学、文学研究の奥行きについてお話しいただいただけでなく、学生有志による演劇、合唱を通して、文学がさらに新たな芸術を生み出すことを体感できた充実の1時間半となりました。

本講演会では、まずセラーズ教授の小説の邦訳『わが妹、ヴァージニア――芸術に生きた姉妹』（原題 *Vanessa & Virginia* 彩流社、2018）を出版された本学名誉教授の窪田憲子先生から大学院の歴史とともに講師の紹介をしていただきました。そしてセラーズ教授は24枚の画像を駆使して、ウルフの文学と姉ヴァネッサの描く絵画との関係、女性と文学や小説技法、女性が作家になるには、自分の心のヴィクトリア時代の理想の女性像「家庭の天使」の亡霊を殺す必要があったこと、さらに教授ご自身が伝記でなくなぜ「小説」という形式でウルフの人生を表現されたのかについて講じられました。続いて夫君である作曲家のジェレミー・サーロウ博士から「ウルフと音楽」との関わりについて美しいピアノ演奏を交えてお話しいただきました。

セラーズ教授の小説はE.ライトの脚本により舞台化され、2009年から2013年にかけて英米仏独ポーランドで上演されています。ウルフの姉で画家のヴァネッサ・ベルの視点から、子供時代の記憶、作家と画家という芸術家姉妹の表現をめぐる葛藤が回想形式で語られた舞台の縮小版をこの度、セラーズ先生が英文学科の学生のためにご執筆下さり、有志の学生三人（両角彩由季さん、田口萌華さん、戸沼瑛弥さん）が、サーロウ博士のピアノ伴奏でヴァネッサとヴァージニアを熱演しました。その上、都留文科大学合唱団の歌声をYouTubeで聴いて感銘を受けたサーロウ博士は、清水雅彦先生と合唱団のために混声合唱曲“I see a ring”をウルフの小説『波』の言葉にのせて作曲してくださいました。講演会、演劇の後、合唱の授業の受講者30名が舞台に上がり、サーロウ博士のピアノ伴奏で熱唱。美しい旋律と歌声が「芸術の秋」にふさわしい夕べの最後を飾りました。

（英文学科准教授 加藤めぐみ）

講師紹介

Susan Sellers（スーザン・セラーズ）

英国セントアンドリュース大学英文学教授。ウルフをはじめとする20世紀英文学、ジェンダー研究に関する著書多数。ケンブリッジ大学出版会刊行のウルフ著作集の副編集長を務める。2008年出版の小説 *Vanessa & Virginia* は芸術家協会賞を受賞。現在16ヶ国語に翻訳されている。

国文学科特任教授　多和田葉子先生　特別講義

――「飛魂」をテキストとして――

開催：2018年7月25日（水）

多和田葉子（たわだ　ようこ）

主な作品と受賞歴

1993年	「犬婿入り」	芥川龍之介賞
2002年	「容疑者の夜行列車」	谷崎潤一郎賞
2012年	「雲をつかむ話」	芸術選奨文部大臣賞
2016年	ドイツ語での執筆により	クライスト賞
2018年	これまでの活動により	国際交流基金賞
2018年	「献灯使」（2014）英語訳により	全米図書賞

多和田先生の特別講義に参加して

国文学科４年　大澤花南

７月25日５号館にて多和田葉子先生による特別講義が行われた。今回講演の題材となった「飛魂」は、深い森の奥の寄宿舎で共に生活をしながら虎使いを目指す女性たちの物語である。この作品には女性や虫、実際には存在しない現象の名前が多和田先生によって生み出されている。多和田先生はこれらの名づけについて「発音は重視しておらず、漢字を始めとする文字たちを絵として見た際に受ける印象を基に名付けた」と述べた上で、このような五感をまたいだ感覚を共感覚という言葉を用いて説明した。多和田先生の文章は感覚を表現すると同時に、文章自体がまた新たな感覚を読者に与えるような印象を受ける。

私たちは見たもの、聞いたもの、嗅いだもの、触れたもの、味わったもの、またこれらが複数組み合わさった感覚について文字に起こすことができる。また読者は文章が表す感覚を、文章を目で見て読むことで追体験する形で想像することができる。多和田先生の文章は難しく、未知の感覚を得るところや全く理解ができないところが多くある。筆者から突き放されたようなこの少し寂しい感覚を、多和田先生の文章は特に感じさせる。「飛魂」ではルビがほとんど使われておらず、文章を絵として見るという味わったことのない体験をすることのできる作品である。講義の最後に多和田先生とお話しすることができたのだが、その際、自分の言いたいことをまとめるのにとても苦労した。あのシーン、このシーンと音にしてしまうことをとても勿体ないことに感じたからだ。この作品において読む行為の他に必要なのは視覚だけであり、音は必要ではない。多和田先生が講義で示した情報の一つ一つが、初めての文章の読み方へのヒントとなっていた。このような未知の感覚や体験を得られる多和田先生の作品、また多和田葉子先生その人をもっと追いかけてみたいと思う講義であった。

国文学科長より

国文学科長
加藤敦子

昨年は都留国際文学祭でパフォーマンスとトークを披露して下さった多和田先生に、今年度は学生と直接対話できる授業をお願いしました。国際化の潮流の中で日本語で書く文学の意義を問う、ハイレベルな講義となりました。本学国文学科も教員全員が連携して、国際化する社会における国語国文学の意義を考えていきます。

10月には国際交流基金賞、11月には全米図書賞を受賞された多和田先生、今後のご活動から目が離せません。

ラグビーワールドカップ2019　500日前キャンペーン

▲優勝トロフィーと一緒に

▼ラクビー部が応募した写真

▲お披露目された
ウェブ・エリス・カップ

社会学科３年　ラグビー部主将　**曽我部 慎平**

都留文科大学ラグビー部は、来年、日本にて開催されるラグビーワールドカップ 2019 の「楕円を見つけて投稿しよう！大会 500 日前キャンペーン」に当選し、９月 12 日にラグビーワールドカップの優勝トロフィーである「ウェブ・エリス・カップ」が都留文科大学にて披露されました。当部の twitter にて、部員がグラウンドで寝転がりラグビーボールの形を表現した写真を、ラグビーワールドカップ 2019、日本のラグビーが少しでも活気づけばという思いで投稿しました。優勝トロフィーである「ウェブ･エリス･カップ」を拝見し、トロフィーの歴史を感じるとともに、部員一同が改めてラグビーをやっているということを実感することができました。チームのスローガンである「一団一心～ one team, one heart ～」のもと、ラグビーをすることができている感謝の気持ちを忘れずに、これからも日々研鑽を積んでいく所存です。

学生の活動　～部活・サークル

関東女子大学バレーボール二部リーグ戦（都留開催）

初等教育学科４年
バレー部主将　**高根沢 早紀**

10月13日、14日に関東女子大学バレーボール二部リーグ戦が、都留文科大学体育館にて行われました。初めての都留開催ということもあり、私たち選手一同もホームで試合ができることに大きな喜びを感じました。13日は神奈川大学との試合でしたが、中盤から自分たちのリズムでゲーム展開ができ、勝利することができました。14日の武蔵丘短期大学戦では、今季のリーグ戦の中で一番の出来の試合ができ、ミスも少なく終始都留文のペースでゲームを展開できました。両日ともホーム開催ということで、バレーボール部ＯＧ・ＯＢの先輩方をはじめ、山梨県のバレーボール協会の関係者の皆様、地域の方々、都留文科大学の学生の皆さんなど、たくさんの方々が応援に駆けつけてくださいました。得点したときの盛り上がりや、苦しい場面での応援席からの心強い声かけのおかげで、自分たちのもっている力を出し切ってプレーすることができました。こんなにもたくさんの応援の中でバレーボールができたことは初めての経験であり、この都留での二戦を勝利することができたのも、この応援あってのことだと選手全員が感じています。日々練習に励んでいますが、その背景にはたくさんの方々の支えがあることを忘れずに、今後も活動していきたいと思います。

全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部に出場

初等教育学科３年　合唱団　団長　**小針叶愛**

私たち都留文科大学合唱団は週に４日、訪問演奏会やコンクールに向けて日々練習に励んでおります。11/24(土)には北海道の札幌コンサートホール Kitara 大ホールにて行われた第71回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にシード団体として出場し、金賞 日本放送協会賞、また10年連続金賞という特別賞を受賞することができました。団員の約半数が大学から合唱を始めたメンバーで構成されている今年の合唱団は、コンクールや各種演奏会に臨むことで経験の有無に関わらず、個人としてそして団としても大きく成長してまいりました。支えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。

自由曲として歌いました「エレミヤの哀歌」は紀元前の悲劇を嘆いたものです。現代にも通じる普遍性があるのではないかと考え、団員一人一人がこの曲に真剣に向き合い、信念をもって祈りを捧げ歌いました。

2009年に初めて金賞を受賞したkitaraの大ホールに９年たった今、シード団体として再び出演できたことを胸に刻み、これからも「文大サウンド」を追求しよりよい演奏ができるよう団員一同精進してまいります。

▲10年連続金賞記念

▼賞状並びに盾、金メダル

▲表彰式後Kitaraにて

ARTWORK

比較文化学科３年
つなぐ代表　**佐藤　笑**

▲ ARTWORK vol.5 の参加者と実行委員

ARTWORK vol.5 の様子 ▶

こんにちは。私たち「つなぐ～都留で今しかできないことを～」は年に２回ほど開催される「ARTWORK」というイベントの企画、運営を行っています。ARTWORK というイベントはもともと初等教育学科(現 学校教育学科)美術専攻の生徒による「自分の作品を誰かに見てもらう機会が欲しい」という思いから企画されたイベントです。その想いは今でも続き、今では個人で趣味としてハンドメイドや写真を楽しむ人たちが集まり、ARTWORK を通じて自身の作品を展示、販売しています。部活やサークルに所属せず、個人で製作活動を行っている学生は実は多く、彼らの作品を多くの人に見てもらう機会を提供することが私たちの活動のベースとなっています。今までに多くの出展者さんが協力して下さったおかげで今年１月には山梨大学さん、山梨県立大学さんとのコラボで「ARTWORK vol.5『1㎡』」の開催、また７月にはオープンキャンパスという大きな舞台で「ARTWORK vol.6『colorful』」を開催することができました。これからも面白い企画を考えていきますので、ARTWORK が開催された際には是非一度足を運んでみてください。

第45回　鶴鷹祭

6月23日（土）と24日（日）の２日間にわたり、２年ぶりに本学において『第 45 回鶴鷹祭（都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦)』が開催されました。

鶴鷹祭は平成 30 年で 45 回目を数え、通算成績では、24 勝 17 敗 2 引き分けと勝ち越しています。しかし昨年、一昨年と敗北しており、本学で開催される今年は２連敗という屈辱を果たすべく、体育会が「力戦奮闘」をスローガンに掲げ全力で戦いました。

２日間にわたり両校の選手たちが接戦を繰り広げた結果、9（都留）－ 13（高崎）と残念ながら本学は勝利を納めることはできず、高崎経済大学が三連覇を飾りました。

来年度は舞台を高崎経済大学に移しますが、本学の体育会部活動に所属する学生たちは、勝利を掴み取るため対抗戦に挑みます。熱い試合が繰り広げられることを期待します。

サッカー

ストリートダンス

第63回桂川祭　開催報告

『BLOOM』というテーマのもと、11月１日（木）から11月３日（土）までの３日間にわたり、第63回桂川祭を開催いたしました。『BLOOM』という言葉には、「開花」「花盛り」という意味があり、桂川祭の華やかさを表現したいという願いが込められています。

毎年恒例となっている開会式のバルーンリリースには、平日であったにも拘わらず多くの方々に参加していただき、桂川祭の幕を開けることができました。様々な団体の模擬店出店やステージでのパフォーマンス、実行委員主催企画等で当日の会場はとても賑わいました。

１日目・２日目には移動水族館企画と移動動物園企画、３日目には芸能人企画を実施し、学内外から数多くのお客様にお越しいただき、年齢問わず楽しんでいただけるものになりました。

３日目の夜には煌びやかな花火が打ち上げられ、第63回桂川祭を無事に三日間終えることができました。

開会式バルーンリリース

打ち上げ花火

全体を通して大きな問題もなく、安全で楽しい桂川祭を開催できたのも、多方面で携わっていただいた数多くの方々のお力添えによるものだと思っております。この場を借りて御礼申し上げます。第63回桂川祭が皆様にとって思い出に残る３日間となっていましたら幸いです。本当にありがとうございました。

（桂川祭実行委員長　鈴木りん）

夏季オープンキャンパス

2018年度、夏のオープンキャンパスは7月の14～15日に行われました。

受験生の悩みを受け止める

教養学部の学校教育学科・地域社会学科および文学部の国際教育学科は両日開催。文学部の国文学科、英文学科、比較文化学科は初日に、学科説明会・公開講義・個別相談会などのイベントを設けて行いました。学科単位のイベント以外にも、大学生活説明会、キャンパスツアー、サークルの発表、学生の自主企画など、いつどこに行っても何らかの企画が行われており、熱気が充満していました。猛暑・酷暑の心配をしておりましたが、結果的には大きな健康被害はなく、熱くて濃い二日間となりました。全体で2300名を超える参加者にご来場いただくことができました。

個別相談会で面白い場面がありました。個別相談は、教員と大学生が、高校生とその保護者の方と一緒にテーブルを囲んで、入試から大学生活まで様々な疑問にお答えするので、盛り上がると20～30分ぐらいになることもあります。相談に乗る学生は、本学への愛を持って、未来の後輩の悩みに明るく誠実に答えてくれています。某学科には、推薦・前期・中期、全ての入試を体験したツワモノがいて、受験生の悩みをありとあらゆる方向から受け止めていたのが印象的でした。

個別相談に限らず、在学生たちがいろいろなイベントで、素敵なお兄さん・お姉さんとして高校生を励ます姿にこちらまで嬉しくなりました。

酷暑の中、準備に心をくだいてくださった事務局の皆様、広報委員の先生方、ご協力下さった先生方に心よりお礼申し上げます。

（広報委員長　古川裕佳）

NEW

入試相談会開催

今年、初めての試みとして８月５日（日）に入試相談会を実施しました。推薦入試を考えている高校生や編入学等の既卒生を対象とした完全予約制、高校３年生、既卒生限定での開催としました。

開催内容は学科説明会、学科個別相談、入試学習アドバイス、保護者説明会、生活相談、キャンパスツアーを実施しました。参加者数は、生徒 168 名、保護者 198 名、合計 366 名でした。

特に、入試学習アドバイスなどは、来場者に高評価で「受験へのモチベーションが上がった」「第一志望なので、入試のアドバイスはとてもよかった」という感想を頂きました。

学科説明会や学科別個別相談では、夏とは違い少人数制だったこともあり、「詳しく話を聞くことができた」「入試について個別相談でじっくり先生に聞くことができて良かった」など概ね好評でした。

来場者からも高評価を得られ、多くの参加者が見込める為、今後も続けて開催していきたいと思います。

秋季オープンキャンパス

本年度で第11回目となる秋季オープンキャンパスは、８月に入試相談会を開催したこともあり、10月８日（月・祝）の１日だけの開催となりました。

主な内容として、学科説明会、公開授業（90 分）、特別講義（60 分）、学科個別相談会、学生生活相談（事務職員対応）、学生の案内によるキャンパスツアー、無料学食体験などを実施しました。

参加した高校生の総数は 334 名と、１日だけの開催にもかかわらず、昨年の４日間開催（382 名）と同様に多くの高校生が参加しました。３年生の参加率が５割を超え、次いで２年生が３割程度でした。

恒例となったキャンパスツアーでは、本学学生がガイド役となり保護者も含む参加者に対し、キャンパス内の施設などをグループで回り、丁寧に説明していました。参加者からは、「施設だけでなく、日常生活の話も交えてとてもわかりやすくて良かった」、「大学の良さを体感できた」等の声が聞かれ非常に好評でした。また、「授業が非常に楽しくこの大学に入学したいと思った」、「学生生活相談では、大学周辺の事や学生生活の様子がわかって良かった」「学食は美味しかった、無料に驚いた」など概ね秋季オープンキャンパスに参加して良かったという感想が多く寄せられました。

しかし、授業開講日という事もあり、教室の確保、学科説明会、公開授業等の受け入れ人数、学食の混雑対応など来年度実施に向けての課題も見つかり、秋季オープンキャンパスの開催日程、内容などを考え直す機会になりました。

夏季集中講座

「現職教員教育講座」を開催

本年度も夏季集中講座として、初等教育学科・地域交流研究センター・教職支援センターの共催による「現職教員教育講座」を、7月25日（水）に開催いたしました。

都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」を『中堅教諭等資質向上研修』というテーマとし、今年度は、初めての試みとして、1日を午前の部・午後の部に分け、2講座を開講する形式で行われました。

この中で、午前の部は、宮下聡先生（教職支援センター特任教授）の『生徒指導』－道徳性の涵養－、午後の部は、中川佳子先生の『特別支援教育』－教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用－を開講いたしました。

本講座は、山梨県教育センターによる「十年経験者研修」の選択講座にも指定されており、都留市内だけでなく県内各地の小中学校及び高等学校より、午前の部が90名、午後の部が83名の多くの先生方のご参加をいただけました。

前期修了者卒業式

9月26日（水）、本部棟3階大会議室において、平成30年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年は22名の学部卒業者のうち、15名が出席しました。当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、福田誠治学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。

教員免許状更新講習

本学では、例年、教員免許状更新講習を開設しております。10年目を迎えた今回は、６月30日から７月29日までの土曜日又は日曜日、計６日間にわたり13講習を開設し、延べ受講者数は520名にのぼりました。

開設した講習は以下のとおりです。

【必修領域】：

『教育の最新事情』佐藤 隆 教授・堤 英俊 講師

【選択必修領域】：

『新学習指導要領に対応した外国語科及び外国語活動の授業づくり』上原 明子 准教授

『学校におけるＩＣＴ活用授業と情報モラル教育』相澤 崇 准教授、日向 良和 准教授、小河 智佳子 特任准教授

『法令改正及び国の審議会の状況等』廣田 健 教授

【選択領域】：

○小学校教諭向け：

『地層と化石の観察』（理科教育）鷹野 貴雄 非常勤講師

『昔話を読む／作る』藤本 恵 教授

『算数授業を通して育てる力をつける指導』（算数教育）滝井 章 特任教授

『感性を働かせて描いてみよう！動いてみよう！』（図工体育）【図工】竹下勝雄 教授・青木 宏希 特任教授・流石 良子 非常勤講師【体育】水口 潔 教授

○中学校、高等学校教諭向け：

『教育 ICT で国語科教育はどう変わるか？』（国語分野）野中 潤 教授

『中学校･高校における授業づくりと評価の方法』（英語分野）萩原 一郎 特任教授

『社会科の新しい動向と教材作り』（社会分野）西尾 理 教授

○小学校、中学校、高等学校教諭向け：

『子どもたちの心とかかわるために』（教育相談）筒井 潤子 教授

『学級集団育成の理論と実際』（学級経営）武蔵 由佳 准教授

ムササビ観察会を開催

地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門の秋季ムササビ観察バスツアーを11月16日（金）と11月17日（土）に開催し、延べ24名が参加しました。

当日は地域交流研究センターに集合して環境 ESD プログラム履修者の学生からの諸注意を聞いたあと、バスで鹿留にある今宮神社へ向かい、ムササビを観察しました。観察終了後はバスで大学に戻り、地域交流研究センター北垣憲仁教授のムササビについて解説していただきました。

観察会の様子は、地域交流研究センターのブログで紹介しています。

参加者から

「思っていたより大きい姿を見ることができ、嬉しかったです。初めは見ることができないかもと不安になったけど、見た時の周りの人たちの喜ぶ声や実際に目の前に現われてくれたムササビを見ることができ、みんなに自慢しようと思いました！」

「ムササビの姿を見ることだけでなく、ムササビの鳴き声を聞くことができ、嬉しかったです！ずっと聞いていたいと思いました。」

「ムササビを見るだけでなく、生態やみんなの感想や質問をふまえて、沢山ムササビのことを知ることができました！スタッフの方の対応や笑顔がとても気持ち良かったです。」

などの感想がありました。

編集後記

地域社会学科准教授
鈴木　健大

この４月に本学に着任してからこの方、どうしても気になっていた場所がある。富士急行大月線「谷村町駅」だ。かつては富士急の直営駅で駅員が住み込んで働いていたそうだが、今は業務委託駅となっている。駅舎は昨年度登録有形文化財の指定を受けた。

私の前任校は四国にあった。JR 四国管内には 259 駅があり、その 80% にあたる 208 駅が無人駅である。無人駅の中には、地域住民が駅舎を守り、さらに駅舎を町内会活動や高齢者サロン、駅コンサートやマルシェなど地域づくりに生かしている事例があることがわかり、学生たちと調べて回っていた。それ以来、ともすれば地域の衰退を象徴する無人駅がお宝に見えて仕方ない。

このたび私のオープンゼミとして学生たちとこの駅舎を地域のまちづくりの拠点づくりに使用させてもらうことになった。目的は２つある。一つは地方鉄道を市民が支えるしくみの提案、もう一つは空洞化したまちの中心にまちづくりの場をつくることである。私が担当している授業の中で学生たちに参加を呼びかけ、現在集まった学生は 1、2 年生 20 人ほど。時間がなかなか合わないことから、学生の提案で「朝活」として 1 限前に集まっている。当面の活動の柱として、地域の子どもたちが放課後集まることができる場づくりを計画している。軌道に乗ったら、少しずつ活動の幅を広げたい。早馬町内会、富士急、市、私どもで駅舎の使い方などについて話し合いを重ね、12 月に入ったら駅舎やその周辺を皆で大掃除して、活動を開始する予定である。

「朝活」でプロジェクトの名称が「ぷらっとはうす」に決まった。プラットホームに隣接した場所に、みんなが気軽に“ぷらっと”立ち寄れて、そして、まちづくりのプラットフォームになれることを目指して。活動に際し、今後クラウドファンディングを行うことも予定している。どうぞ皆様、これから温かくお見守りください。

ぶんだい堂

JLA図書館実践シリーズ39 図書館とゲーム ―イベントから収集へ―

井上奈智、高倉暁大、
日向良和　著
2018 年 10 月 10 日発行
公益財団法人　日本図書館協会

◇ひなたよしかず
　共通教育　准教授

はじめての校長講話 ―学期別・場面別例話75選―

原　和久　著
2018 年 3 月 1 日発行
学事出版

◇はら　かずひさ
　国際教育学科　教授

川島雄三は二度生まれる

川崎公平、北村匡平、
志村三代子　編集
2018 年 11 月 15 日発行
水声社

◇しむら　みよこ
　比較文化学科　准教授

訃　報

平成30年９月20日（木）、名誉教授 鷺　只雄氏がご逝去されました。
ここに先生の生前の御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

公立大学法人
都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1
☎0554-43-4341
URL：http://www.tsuru.ac.jp/

都留文科大学報　第 138 号　2018 年 12 月 21 日発行

都留文科大学広報委員会
古川裕佳（委員長）・日向良和（副委員長）・新保祐司（担当副学長）・水口潔・鈴木健大・エバンス・志村三代子・ヨハンノルドストロム・山口博史・小林泰憲（経営企画課長補佐）・清水友美子（企画広報担当）・関戸聡子（企画広報担当）